

ガーディアン（護符）

コリヤーク

1945年頃

左21.4cm 右16.0cm

第11回特別展「たばこと民族文化」	2
講演会「たばこの文化史」	5
平成8年度海外民族調査報告	6
講座「教師のための北方文化研修会」	8
講習会「フィールドワークin天都山」	10
地域国際交流フォーラムほか	11
News	12

「たばこと民族文化 ―たばこが北方に伝わるまで―」

平成8年7月13日―9月22日

7月13日から9月22日まで第11回特別展「たばこと民族文化 ―たばこが北方に伝わるまで―」を開催しました。アメリカ大陸で生まれたたばこ文化は、ヨーロッパをつうじて世界各地に紹介され、それぞれの地域で嗜好品として流行するなかで各地で独特のたばこ文化が形成されました。たばこの歴史は文化の伝播や定着、交流の在り方を反映するものと考えられます。今回の特別展はそのような意図から各地の喫煙具等の展示をつうじてたばこ文化の軌跡をたどり、時代や地域におけるたばこ文化の特徴をあきらかにしようと企画されたものです。

展示資料はアメリカ、ヨーロッパ、中近東、東南アジア、中国、日本、朝鮮半島そして北東アジア、アラスカの資料から構成されています。当館資料も少数含まれていますが、200点近くの資料の大部分は、国立民族学博物館およびたばこと塩の博物館より借用のご協力をいただきました。

以下に特別展の概要を各コーナー別に報告します。

植物としてのタバコ

栽培種の写真、種子、栽培品種などの標本を展示し、植物としてのタバコを紹介しました。

原産地におけるたばこ文化

アメリカでは栽培したタバコ葉をパイプや葉巻による喫煙、また、嗅ぎたばこや噛みたばことして利用していました。このような利用は嗜好品としてだけではなく、薬用や占い、神々の意思を知る儀式でも重要な役割をはたしていました。古代マヤ文明の遺跡には「たばこを吸う神」のレリーフが残されており、たばこが神々と深い関係にあることを示しています。また、11世紀からスペインに征服される16世紀までメキシコ西部に栄えたタラスコ王国の遺跡から多くの土製パイプが出土していますが、これらのパイプは神官たちが儀式の際に喫煙するためのものでした。北アメリカ中部平原地域のインディアンは対立する集団との戦いを終結して和睦を結ぶ儀式で、両者がパイプを回して喫煙し、和平の証しとしたことが知られています。

主な展示資料は、南米のコロンビア、パラグアイ、ペルー、ブラジル・アマゾン川流域の先住民のパイプや大型の葉巻、メキシコの土製パイプ、また南米の嗅ぎたばこ用の管や粉末状の嗅ぎたばこを入れる巻き貝製の容器、北アメリカ平原インディアンのパイプ、たばこ入れ、パイプ入れなどです。



ヨーロッパへの^{たば}伝播

1492年のコロンブスによるアメリカ到達を契機にヨーロッパに伝わったたばこは、当初は薬草として注目され、万能薬とされた時代もありましたが、16世紀後半から17世紀にかけて嗜好品として利用されるようになります。ヨーロッパ各地でパイプによる喫煙がさかんになり、特色あるパイプが作られるようになります。展示資料は次のような、代表的なヨーロッパのたばこ道具です。イギリスで製造、利用された、白色粘土を素焼きにしただけの簡素なクレーパーパイプ（やがてオランダでも製造がはじまった）、ツツジ科のホワイトヒースの根から、火につよいブライアーパイプ、パイプの装飾性の点から彫刻に適した柔らかさをもち、多孔質のため使用していると^{あめ}銜色に色づく海泡石で作られたメアシャムパイプなどです。

いっぽう喫煙ばかりではなく、タバコ葉を粉末にして鼻孔で吸う嗅ぎたばこがフランスの上流階級に流行しました。今回展示した嗅ぎたばこ容器のように小型で工芸的にすぐれたものが使用されていました。

アジアへの伝来と拡散

たばこは16世紀半ばころからアジアへもたらされはじめ、その主役は大航海時代を担ったポルトガルやスペインの交易船でした。ヨーロッパの喫煙パイプがアジアに伝わって、いわゆるキセルが生まれたとされています。火皿と吸い口が金属や石製で中間がアジアに豊富な竹製の場合が多く、地域によって形や材質に違いがみられます。

日本ではキセルによる喫煙が発達しましたが、ほかのアジア地域ではキセル状のパイプとともに、葉巻や木の葉などで巻いて喫煙する習慣もみられ、また、中近東で発祥したとされる水たばこはインドなどを経てタイ、中国、ネパールなどに伝わっています。嗅ぎたばこはインドネシア、中国、ネパールでみられます。とくに、中国では17世紀半ば頃にキリスト教の宣教師によってヨーロッパの嗅ぎたばこが伝えられ、清朝の上流階級を中

心に流行がみられます。

主な展示資料はボルネオ島のたばこ入れ、ミャンマーの石製パイプ（出土資料）、タイのパイプ、水パイプ、中国の水パイプ（竹筒状の水パイプ2点：中国雲南省、金属製1点）、中国のキセル、嗅ぎたばこ容器（ガラス製、陶磁器製）、台湾のキセル、パイプ、たばこ入れ、朝鮮半島のキセル、たばこ入れなどです。

日本のたばこ

明確な年代はあきらかではありませんが、日本にたばこを伝えたのもスペイン、ポルトガルのいわゆる南蛮船です。天正・文禄時代から慶長の初期（1500年代末ころ）には喫煙の風俗が記録され、1620年ころには北海道を除く全国に喫煙が普及し、タバコの栽培もひろまっていったと考えられています。17世紀前半には日本各地でタバコ栽培が定着し、それにともなって刻みたばこを製造販売する小売の店があらわれはじめます。包丁によるタバコ葉の刻み方も、火つきをよくするために、より細く刻む技術が発達し、髪の毛ほどの細さに刻む「細刻み」が一般的になりました。それにともなってキセル^{がん}雁首の火皿の大きさも小さくなります。江戸時代をつうじてキセルやたばこ入れ、たばこ盆など喫煙具や周辺さまざまな道具、什器^{じゅうき}の発達にみられるように、たばこは鎖国政策のもとで日本独自のたばこ文化を生み出して行きました。



日本のたばこ盆

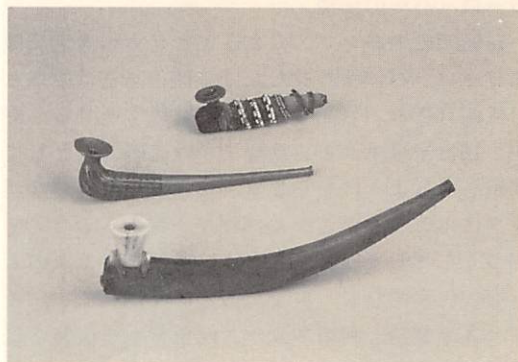
このような日本独特の文化は、展示された江戸期のキセル、たばこ入れ、たばこ盆の精緻な工芸や凝った意匠にみることができます。

北方へのたばこの伝播

アイヌにたばこがもたらされた年代はあきらかではありませんが、1643年に北海道、サハリン沿岸を航海したM. G. フリースは十勝地方や厚岸、国後島さらにはサハリンのアイヌが喫煙をしていることを記録しています。タバコは葉の状態で本州方面から移入され、葉20枚で1把と数えられていました。タバコ葉は各自がナイフで刻んで使用していました。キセルも本州方面からもたらされ、遺跡からも本州方面で生産されたキセルの雁首や吸い口が出土しています。しかし、展示資料のような木製のキセルも使われており、たばこ入れとおなじくアイヌ自身が製作したものです。木製キセルの材料はノリウツギ（別名サビタ）などで、根の太い部分を火皿にしています。

展示資料に柄が二股になった、つまり吸い口が2つあるキセルがあります。この型のキセルはクマ送り儀礼（クマ祭り）の際に、一方の吸い口をヒトが、もう一方を送られるクマの霊が吸うとされるものです。たばこ入れは、江戸時代のたばこ入れと同じように、腰帯に紐を挟み込んで携帯するように作られており、やはり同じくキセルを携帯するためのキセル差しが付随する場合が多くみられます。

北方地域ではタバコ葉は毛皮交易の主力商品となっていました。北東アジアにおけるたばこの普及は中国清朝の成立・安定とロシアのシベリア進出によって拡大したといつてよいでしょう。アラスカへのたばこは北東アジアから伝えられたと考えられています。つまり、南部に居住するインディアン諸族から伝えられず、地球を一周して伝わったこととなります。



北方地域のパイプ
上：コリヤーク
下2点：アラスカ・イヌイト

17世紀の半ば前後から中国東北部産のタバコ葉がアムール川をつうじてシベリアやサハリンにもたらされ、また、中国製のキセルは日本や、カムチャツカ半島さらには遠くアラスカまで伝わっていました。ロシアも16世紀後半からシベリアに進出を開始し、シベリア先住民にウクライナ産タバコ葉や中国産のキセルをもたらすなど北東アジアのたばこの普及に大きな影響を与えていました。このコーナーの展示資料はアイヌの自製品であるキセル、たばこ入れ、コリヤークのパイプおよび喫ざたばこを入れる容器、たばこひき臼、アラスカにアジアから伝わったパイプです。

このような展示資料にみられる多様なたばこ文化は、近年紙巻きたばこが急速に普及するにしたがって消滅しようとしています。5,000人弱の皆様にご覧いただきましたが、来館者のなかには「たばこ」だから見ないという方もおられ、かつて世界中で受容された嗜好品の立場は時代の価値観のなかでゆらいでいるのかもしれませんが。

（学芸課 渡部 裕）

「たばこの文化史」

平成8年7月28日

講師：たばこと塩の博物館学芸員

半田 昌之 氏

第11回特別展「たばこと民族文化 ―たばこが北方に伝わるまで―」の関連事業として7月28日にたばこと塩の博物館学芸員の半田昌之氏を講師に講演会「たばこの文化史」を開催しました。スライドの映写を交え世界各地のたばこ文化について講演をいただきました。以下にその要旨を紹介します。

(植物としてのタバコについての概説に続いてたばこ発祥の地であるアメリカ大陸のたばこ文化が紹介された。)

アメリカ大陸のたばこは薬用あるいは嗜好品でもあったが、ヨーロッパとの接触をもつまでは、儀礼的な場面に使われる事が主であった。現在考えられている古代マヤ文明のたばこ文化の最も古い起源は7世紀後半のメキシコのマヤの遺跡パレンケの神殿に求めることができる。そのレリーフには神(神官)が葉巻状のたばこを口にくわえている様子が彫られている。このたばこの神は「マドリッド絵文書」の絵文字から作物の豊穰や雨をもたらす神と考えられていた。またメキシコのミチョアカン州のタラスコ文化期末に聞き書きされた「ミチョアカン報告書」にパイプ喫煙の様子が描かれているように、この北方からやってきたチメカ族はパイプ喫煙を広め、これらのパイプはヨーロッパのパイプに影響を与えたと考えられている。北アメリカ中部平原のインディアンにみられる「平和のパイプ」は戦いを終結する際の和睦を意味するパイプ儀礼である。

ヨーロッパに伝えられたたばこ文化の変遷を主に喫煙用パイプの形や素材からとらえることができる。北アメリカ東部を植民地としていたイギリスでは白い素焼き粘土製のクレーパーパイプが長い間使われ、中米に拠点をもったスペインでは葉巻が吸われてきた。ヨーロッパの代表的なパイプに中



央ヨーロッパの蓋付のパイプや18世紀に入ってトルコ地域で見いだされた素材である海泡石製のメアシャムパイプ、19世紀になって流行がはじまった地中海沿岸に成育するホワイトヒースの根から作られるブライアーパイプなどがある。いっぽう、嗅ぎたばこはフランス・ブルボン王朝で流行し、とくにベストの予防薬として考えられたことから、ヨーロッパに広がった。この嗅ぎたばこは1700年代になってフランスの宣教師によって中国に伝えられ、清の上流階級に流行した。アメリカにはなかった水パイプはトルコなど中近東で17世紀に生まれたと考えられ、インド、中国にも伝わった。

日本のたばこ文化の歴史は風俗画や喫煙具をつうじて概観することができる。17世紀の初頭前後の南蛮屏風絵に初期の喫煙風俗が描かれている。17世紀後半からたばこに関する風俗画が多くなり、日本のなかでたばこが各地に定着した様子がうかがえる。江戸幕府ははじめ喫煙を禁じ、武士は長い間喫煙ができなかったが、慶安年間に屋内での喫煙が許され、武士も喫煙を始めるようになった。しだいに喫煙具、たばこ盆も工芸的にすぐれたものが作られ、きせるや、たばこ入れなどに精緻な細工、凝った意匠がほどこされるようになる。これらのたばこに関する小道具は、贅沢を禁止された時代に、贅を尽くす対象であったわけで、たばこは時代の姿勢を読み取るよい素材ではないか。

このような世界各地のたばこ文化の伝統は紙巻きたばこの普及などによって、しだいに自らの文化を反映した伝統的な嗜好品文化は衰退してきた。今後、嗜好品文化がどのようにとらえられていくのかを考える上でもこのような歴史を振り返ることは意味があるのではないか。

平成8年8月3日－9月2日

北海道立北方民族博物館学芸員

齋藤 玲子

平成4年のアメリカ合衆国、6年のスウェーデン・フィンランド・ノルウェーに続き、今夏デンマークのコペンハーゲンとグリーンランドでの調査を行いましたので、その概要をご報告します。グリーンランドは「エスキモー文化」の最東端に位置し、その研究史上、重要な地域として注目されてきました。また、イヌイトの総人口の半数近くがグリーンランドに居住しており、カナダ、アメリカ（アラスカ州）、ロシアと違ってイヌイトが社会のマジョリティ（多数派）となっている唯一の地域です。グリーンランドは、18世紀からデンマークの植民地となり、現在もデンマーク領となっています。しかし、人口約55,000人のうちおよそ8割がイヌイトのアイデンティティを受け継ぐ「グリーンランダー」、残り2割が非グリーンランド生まれの人びとであることから「デンマーク国内において特別の民族社会を構成する」として、1979年に内政自治が認められ、さまざまな権限が国家から委譲されています。

調査は博物館を中心に、グリーンランド・イヌイト文化の研究の歴史と資料の所蔵状況の概要を把握し、各地の研究機関とのネットワークをつくることを目的としました。

コペンハーゲン：8／4－15

最初の10日あまりは、デンマーク国立博物館を拠点に調査を行いました。

研究者であり探検家としても有名な、グリーンランド生まれのデンマーク人K.ラスムッセン（1879－1933）は、数々の極北での学術調査を組織し、これらの調査で収集された物の多くが国立博物館に収められています。彼は、実現できなかったシベリアでの調査の代わりに、1920年代後半を中心にモスクワの博物館との資料交換やロシア系ドイツ人などからの購入によって精力的に北東アジアの民族資料を集めており、同館にはイヌイト

以外の北方民族の資料も数多く所蔵されています。

伝統ある博物館の民族誌部門には8人の研究員がおり、受入れの窓口となってくださったメルゴー（J.Meldgaard）博士はグリーンランド考古学の第一人者です。北方民族全般を担当しているギルバーク（R.Gilberg）氏とアイヌを含む日本や中国などの地域を担当するホーンビュ（J.Hornby）氏からも、資料データベースの使い方からそれぞれのコレクションの成り立ち、関連文献まで、さまざまなご教示をいただきました。

また、同館にはグリーンランド事務局が設けられており、関係資料の展示・整理・管理を行いながら、徐々にグリーンランドへ返還するための事務を進めています。グリーンランド・イヌイトだけで13,000点を越すコレクションの中から、毎年展示替えも行っています。担当者のハーゲン（B.Haagen）氏には、収蔵庫の一部も案内いただきました。膨大な資料の多くは郊外のブレード博物館の収蔵庫に移されたということで、資料カードや実物を手に取る機会はありませんでしたが、展示資料とデータベースを見るだけでも大変勉強になりました。

国立博物館からの紹介で訪れたポーラーセンターは、グリーンランドでの自然科学・人文科学全般にわたる調査を組織し、資金の確保から報告書作成までの研究活動を支援する機関で、充実した図書室と広報部門も備えています。同じ建物の極北研究所にはアーカイブズがあり、写真資料の保管なども行っています。また、コペンハーゲン大学・エスキモー学科の教員や学生が利用できるスペースも確保されています。



デンマーク国立博物館（左側）に面する通り
（コペンハーゲン）



グリーンランド国立博物館の展示室
(ヌーク)

研究機関以外で訪問したグリーンランダー・ハウスは、デンマーク本国に暮らすグリーンランド出身者の集会所として、さまざまな行事や生活相談などを行っている機関です。コペンハーゲン以外にも主要な3都市に所在しています。

ヌーク（ゴットホープ）：8/16-23

グリーンランドの首都ヌークは人口約15,000人、街の中心部から徒歩数分の海岸にグリーンランド国立博物館が建っています。職員数18人と当館とはほぼ同規模のあまり大きくはない施設ですが、本国からの資料返還に伴い、保存管理や建物の整備を専門とする職員も数人配属されています。

ここでは実際に資料カードをひきながら、収蔵庫で実物を撮影することなどもできました。資料の管理方法は、入手先・入手時期を一にするコレクションごとの索引（複数点の資料を含む）、これに対応する来歴等のファイル、資料1点ずつのデータが記入された通称ブルーカードと呼ばれる青色のカードの3種類があり、ブルーカードは、デンマークの歴史系博物館共通の分類（主に用途別）によって、コレクション番号順にストックされています。簡単に目的別の資料を探し出すことのできるこのシステムには大変感心しました。

そのほか、ロージング（E.Rosing）館長をはじめ博物館の方々の配慮でグリーンランド政府の文化教育部門や、図書館、アーカイブズを訪問することができました。

カコルトック（ユリアネホープ）：8/24-27

人口約3,000人のカコルトックは南部では最大の町で、教育の中心ともなっています。黄色い壁の印象的な博物館は、こじんまりした外観からは想像しがたいほど多くの資料が展示してあり、大きなものでは4隻のカヤックのほか、発掘資料から近現代の歴史的写真まで幅広く、しかもグリーンランド語（イヌイト語）、デンマーク語、英語、ドイツ語の4言語でパネルが書かれていました。また、博物館の横に復元された土の家は内部に入れるようになっており、昔の生活が体験できる場として効果的な施設でした。ここでも館長のニューゴー（G.Nyegaard）氏から丁寧な説明を受け、資料カードのコピーや撮影をさせていただきました。

ナルサック：8/28-30

最後に訪れたナルサックは比較的温暖な地で遺跡も多く、周辺では羊の飼育なども行われています。この羊毛やアザラシの毛皮、特産のピンク色の美しい石などを素材にした工芸品製作も重要な産業となっています。博物館は、歴史・民族資料の展示館を中心に、土の家や19世紀の交易所を復元したものなどいくつかの建物に分かれています。同館も小さいながら情報量は多く、学芸員の熱意が感じられる印象的な展示でした。

各地の関係者の方々に大変親切にいただき、短い滞在ではありましたが、さまざまなことを学ぶことができたと思っています。現在、集めてきたデータ類や写真などを整理中です。博物館で得た情報ももちろんですが、日本にいてなかなか知ることのできないグリーンランドの今日の生活についても、いずれ紹介してみたいと考えています。



氷河の浮かぶ入り江のそばに牧草場がひろがる
(ナルサック)

教師のための北方文化研修会

平成8年9月14日

図書館、公民館、博物館など社会教育機関は、地域社会にうみだされた時点で学校教育とは極めて密接な関係を形成します。

本研修会は、学校教育に地域の博物館がどのように利用され役立てられているのか、また博物館はどの場面で学校教育と関連がもてるのか、学校側からみた博物館のあるべき姿はどんなものかといったことを事例に即して検討することを目的として、教科や部活動において体験的な要素を取り入れ、その中で博物館とのつながりを大切にしてこられたお二人に事例報告いただきました。またそのあと討論を行いました。

以下にこの研修会の概要を掲載します。

■ 縄文時代体験をとおして

丸瀬布町立丸瀬布中学校

教諭 生田 浩之 氏



歴史の楽しさ、例えば数千年前の縄文時代のことを生徒に知識として身につけさせるためには、机上の学習だけでは難しい。そこで体験学習を通すことによって、それが身近なものになり、野蛮とか未開とかといった縄文時代のイメージが取り払われ、いかに当時の技術力が優れていたのかを知ることになると考えた。さらに考古学の楽しさを味わい、次代を担う人がでてくればいいとの期待もある。これまで取り組んできたメニューは、

生徒の中から出された^{たてあな}竪穴式住居づくりと縄文土器の野焼きである。

竪穴式住居づくりは、選択社会科を履修した3年生と歴史分野を選択した2年生が中心となった。生徒からの希望で実現することになった竪穴式住居づくりは、平成6年度から、継続して今まで取り組んでいる。具体的な作業である床面となる穴掘り、柱穴掘り、柱となる丸太切りなどは、普段ほとんどすることのない労働である。生徒たちはこれに従事することによって、先人の偉大さを知るひとつのきっかけとなったことは確かである。

竪穴式住居復元のモデルにしたのは道東・標津町のポー川史跡自然公園のもので、公園内の資料館からはそれに関するたくさんの情報を提供してもらった。また木材やわらなどは、町内の人から無償での協力があった。平成6年度は竪穴を掘り柱を立てることだけで終わり、その翌年は屋根に取りかかる。今年も屋根葺きの続きが残っている。

土器はどうやってつくるのか、という生徒からの疑問から始まった土器づくりは、平成8年度に材料となる粘土づくりから始めている。町内にモデルになる完全な形の土器がないことから、土器のイメージを作るために生徒たちを近くの町の資料館へ連れて行くということもあった。原料となる粘土採取は町内の畑で行い、それに市販の焼き物用の粘土を混ぜた。燃料になる薪についても地域の協力を得た。

僅かずつ積み重ねてきた体験学習であるが、やっていて気がついた点がいくつかある。その一つは時間の確保である。選択教科は本来授業時間数が少ないうえ、野外学習は天候に左右される。授業時間外ということになれば、春から秋にかけては部活動、学校行事などと必ず競合してしまう。次は予算面のことである。学習計画と学校予算が必ずしも合致しないため、かなりの部分でひずみが生じてしまうことがある。学校をとりまく地域の住民からの理解がなければ、思い切った活動は難

しい。三点目は、学習内容を奥の深いものにする
とすれば専門的な知識・技術が要求されるという
ことである。自分の場合、今回取り組んだ体験学
習は元々自分の専門分野であったことから大学、
博物館にいる専門家に直接教えてもらったり、助
言をもらったりした。特に身近な博物館は、資料
の活用場、体験学習の場、学校教員へのアドバ
イスの場として大いに開かれるべきだと思う。

■ 高校生が学んだアイヌ文化

財団法人日本私学教育研究所

客員研究員 福岡 イト子 氏



旭川市^{ちかふみ}近文には、誇り高いアイヌの人たちが住
んでいる。ここで高校教師を務めることになった
私には先住民アイヌのことについての知識が全く
といって良いほど欠けていた。そんな自分が、結
果として永年、高校生のクラブ活動である「郷土
部」を率いて上川アイヌの文化研究を行ってきた
が、今考えると冷や汗が出ることが多い。

しかし、その都度そういった方面にほとんど知
識がなかった自分を助けてくれたのが旭川市郷土
博物館の松井恒幸さん（故人）であった。松井さ
んは、どのようなことにもまず文献調査の徹底を
強調し、自ら文献を提供してくれた。またある時
は、聞き取りの方法についても前職である新聞記
者の経験を生かしたアドバイスをしてくれること
もあった。

旭川竜谷高校において上川アイヌの研究を始め
た昭和40年代前半の頃、高校生は三無主義といわ
れて無気力、無感動、無関心を気質としていた。

しかし郷土部の活動は違った。自分の頭で考え、
行動し、創造する、をモットーとした体験を通し
た学習活動であった。

そして研究の目的は、学校教育の一環であるク
ラブ活動を通して北国の厳しい風土と調和し、自
然に感謝して生きるアイヌの生活の知恵に学ぶこ
とにあった。そうすることによって自然に大地へ
の畏敬の念を抱くようになり、生徒自身がこの大
地に足を踏まえて生きることになる。

生徒たちは、フィールド調査からたとえば次の
ようなことを学んだ。

アイヌ語地名は生活と結びついていて、食べら
れる植物が群生しているところをアイヌ語では
「ハルウシナイ（食料・多くある・沢）」と呼んだ。

エゾヤマハギの花の散る頃の雄サケの皮が、丈
夫で靴にいい。つまりアイヌにとってエゾヤマハ
ギはサケの状態を見極めるための植物（指標植
物）でもある。雪上ではサケ皮の靴は、かんじき
（アイヌ語でテシマ）との組み合わせで用いられ
る。かんじきはヤマグワの幹から作られ、ヤマグ
ワの幹はアイヌ語でテシマニ（かんじき・木）とい
う。アイヌは使える部位に名前を付ける。アイヌ
は植物は神が人間のために地上に降ろされた食べ
物であり薬であるから、食べる分だけ神に感謝し
つついただく。

郷土部でのアイヌ文化研究をとおして生徒たち
は、「今まで経験したことのない感動や喜びを与
えてくれたアイヌは、尊敬すべき人でありこれか
らの人生の支えになる」といって旅立つ。文化は
どのようにして作られてゆくのか、そのプロセス
を通して心やものの見方・考え方を身につけるこ
とはその生徒が将来アイヌ文化を正しく理解する
ことにつながってゆく。

この後の討論は、体験学習を進めるに当たって
の具体的な課題について、またアイヌ文化を今、
子どもたちにどのように教えるのがよいのかといっ
たことが主なテーマとなって展開しました。

（学芸課 青柳 文吉）

「フィールドワークin天都山」

平成8年9月15日

講師：財団法人日本私学教育研究所
客員研究員

福岡 イト子 氏

北方民族博物館が位置する天都山は、標高200メートルほどの低い山ですが、オホーツク海に向き合うようにあることから、眺望がよいことで有名です。このことから天都山の頂上は北海道では唯一、国の名勝として指定を受けているほどです。オホーツク海、知床半島はもちろんのこと、砂嘴が発達してできた涛沸湖、能取湖をはじめいくつもの湖が眼下に広がる景色は雄大です。このフィールドワークは、天都山の頂上付近の東斜面に位置する道立オホーツク公園の散策路を利用して行いました。講師に福岡イト子氏を迎え、この地域に生育している木や草がアイヌの人びとにどのように生活の中に取り入れられていったかについて、実物を見ながらの説明を行いました。福岡さんは旭川竜谷高校の郷土部の顧問として、二十数年間上川アイヌの古老と旭川市内の嵐山、旭山などを歩いた経験をお持ちで、その成果の一部は著作としても発表されています。

公園内は大きく広葉樹のところと人工的な植林を施したカラマツ林のところにわかれます。シラカンバ、イヌエンジュ、イタヤカエデ、ミズナラ、オオバボダイジュなどの広葉樹には、ヤマブドウ、サルナシ、マタタビなどの蔓があちらこちらでからまり、それらはたくさんの実をつけていました。その下にはトリカブト、エゾヤマハギ、ヤマヨモギ、フキ、ワラビなどが花や大きな葉を付けています。

手入れがなされているカラマツ林の林床には、オオウバユリ、ヨブスマソウ、エゾイラクサ、サイハイラン、フッキソウ、アマドコロなどが見られました。カラマツ林の周辺には、ヤマグワ、シナノキ、センノキなどの広葉樹が成長しています。講師のこれら植物に対するたくさんの説明の中からいくつかを紹介します。



オオウバユリ（^{りんけい}鱗茎はアイヌ語でトゥレブ（溶け・させる・もの））：この根から採ったデンプンはアイヌには、重要な食料源でした。掘り出す時期は遅くても夏ころまでです。採ったデンプンは円盤状にして丸め、乾燥させて保存食にしました。

トリカブト（根はアイヌ語でスルク）：秋に紫の花を付けるトリカブトの根は毒性が強く、アイヌは矢毒として古くから狩猟のために用いてきました。生育地によってもトリカブトの毒性に違いがあるといえます。

シナノキ（幹はアイヌ語でニベシニ（木・もぎとった裂片・木））：上川アイヌはシナノキの内皮を縄や糸にして広く利用しました。家を建てる時にも、このシナノキの皮をたくさん用意しました。

講師が説明する木や草花に対するアイヌの人びとの考え方や利用の仕方に改めて感心させられることが多かった講習会でした。

※9、10頁のアイヌ語表記、語句の意味と説明は、福岡イト子著「アイヌ植物誌」1995（草風館）による。

平成8年度
地域国際交流フォーラム

平成8年9月19日、20日

社会の様々な分野で国際化が急速に進展している今日、道内においても在住外国人が増え、道民が異なった文化をもった人びとと接する機会が増えています。両者の交流を実り豊かなものにし、互いに住みよい地域社会を築くためには、北海道の文化に対する認識や国際交流の在り方についての学習の場を各地域において拡充する必要があります。

このため北海道や北海道が位置している北方圏の文化及び交流の在り方についての学習機会を提供し、市町村における国際交流に関する学習機会を提供する指導者を養成することを目的に、地域国際交流フォーラムを北海道教育委員会と当館を管理運営する財団法人北方文化振興協会の主催で9月19、20日に網走セントラルホテルほかで開催しました。

飯田健一氏（防衛庁防衛研究所研究部長・元NHK解説主幹）による講演「異文化交流の視点」のほか、映像フォーラム、パネルディスカッション、博物館視察などが行われました。



『研究紀要 第5号』について

「北海道立北方民族博物館研究紀要第5号」が刊行されました。内容は次のとおりです。

大林太良「アイヌの靈魂観とツングースの靈魂観」

大村敬一「環境を読む鍵としての色彩：カナダ・イヌイトの色彩語彙と色彩カテゴリーに関する試論」

鈴木ひろ美「アイヌの下紐（ウプソル）について」

渡部 裕「北東アジア沿岸におけるサケ漁（Ⅰ）：資源と捕獲・利用とその意義」

齋藤玲子「現代社会におけるアイヌの工芸の在り方：観光をとおした研究に向けて」

笹倉いる美「資料紹介 コリヤークのガーディアンとチャーム」

楊暘（土井徹・中村和之訳）「明代の東北アジアシルクロードと文化現象としての蝦夷錦」

佐々木亨・笹倉いる美「のるりすと、ミュゼランド1995：北方研究・博物館学研究データベース」

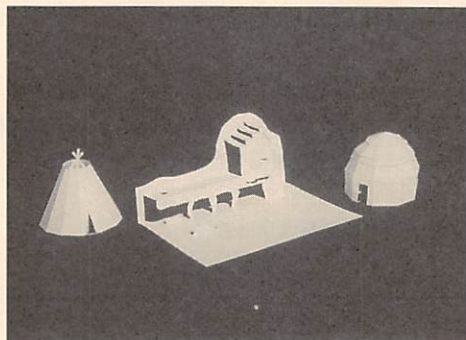
企画展 作ってみよう入ってみよう「きたのすまい」

平成9年2月4日（火）～3月16日（日）

会場：当館特別展示室

観覧は無料です

サミのテントをはじめ、イヌイトのイグルー（雪の家）模型、モンゴルのテント（バオ）模型などを展示し、北方民族のすまいにみられる寒さに対する工夫や生業との関わりを紹介します。開催期間中、博物館クラブ（小中学生対象）では、1月25日（土）に屋外でイグルー作りに挑戦し、2月8日（土）にはペーパークラフトで北のすまいを作ります。



行事中止のお知らせ

11月8日(金)に予定していた、博物館フォーラム・博物館と地域研究「モヨロ貝塚とオホーツク文化を考える」は中止になりました。

執筆者から 贈呈を受けた書籍 (7月～9月)

梶原洋編 1996 「国際シンポジウム「東アジア・極東土器の起源：縄文文化の源流を探る」(予稿集)」東北福祉大学

主な来館者

- ・ 8/23 西田健彦氏(文化庁文化財調査官)
- ・ 8/30 参議院環境特別委員会一行
- ・ 9/18 孫崎亨氏(北海道担当大使)

資料収集評価委員会開催

平成8年度第1回資料収集評価委員会を7月18日に札幌市において開催しました。

資料収集評価委員は次の各氏です。

- 岡田淳子氏(北海道東海大学教授)
- 木村英明氏(札幌大学教授)
- 龍村あや子氏(北海道東海大学教授)
- 津曲敏郎氏(小樽商科大学助教授)

その他の行事報告

- 博物館クラブ
 - 7/13 「土器に親しもう」
 - 8/9 「インディアンのパーククラフト」
 - 9/28 「ナーナイ風ペンスタンドづくり」



11月から1月の行事

- ・ 11/3 「モヨロ貝塚とオホーツク文化解明の道のり」講師 前田潮氏(筑波大学)
- ・ 11/9 博物館クラブ「1日博物館体験」
- ・ 12/8 講習会「モカシづくり」
- ・ 12/14 博物館クラブ「北方民族の文様でつくる年賀状」
- ・ 1/25 博物館クラブ「イグルーづくりに挑戦」
- ・ 1/26 「ミュージアム映写室」

体験学習

修学旅行などの団体向け体験学習メニューを用意しています。詳細についてはお問い合わせください。

担当：学芸課 青柳 文吉

FAX情報サービス

FAX情報サービス(24時間)をしています。ポーリング機能のあるFAXをご利用ください。博物館の行事や休館日などをお知らせします。FAX番号は0152-45-3889です。

観覧者動向 7月～9月

	常設展示	特別展示
7月	4,810名	884名
8月	8,956名	2,926名
9月	5,684名	1,059名

・第11回特別展の観覧者数は4,869名でした。

職員の異動

- ◇転出(10月1日付)
 - 副館長 佐藤軍治
(北海道立社会教育総合センター副所長へ)
- ◇転入(10月1日付)
 - 副館長 木村俊昭
(十勝教育局次長から)